

作業療法学生を対象とした 精神障害領域臨床実習自己効力感尺度作成の試み

吉村 友希^{*1}, 與座 嘉康^{*1}, 久崎 孝浩^{*2}

^{*1} 熊本保健科学大学保健科学部, ^{*2} 九州ルーテル学院大学人文学部

A Trial to Develop a Self-Efficacy Scale for Psychiatric Clinical Training for Occupational Therapy Students

Yuki Yoshimura^{*1}, Yoshiyasu Yoza^{*1}, Takahiro Hisazaki^{*2}

^{*1} Faculty of Health Sciences, Kumamoto Health Science University

^{*2} Faculty of Humanities, Kyushu Lutheran College

精神障害領域の実習で学生は、領域固有の対象者対応の困難さを感じていることが明らかとなっている。本研究では、実習での困難を対処可能とする要因として自己効力感に着目し、作業療法学生の精神障害領域臨床実習における自己効力感を高める教育介入の効果判定のための尺度試案を目的とした。精神障害領域臨床実習を履修済みの学生に面接を行い、得られた情報から尺度項目を作成し、尺度の信頼性の検証を行った。因子分析の結果、「実習に対する自律的動機づけ」因子、「実習場面での自己コントロール行動」因子の2因子構造および信頼性が確認された。

キーワード: 自己効力感, 臨床実習, 精神障害領域作業療法, 尺度, 作業療法学生

1. はじめに

作業療法の専門領域を障害別に大別すると身体障害と精神障害に分けられ、作業療法教育カリキュラムでは、この両方の領域を学習する。身体障害に比べて精神障害に関する学習に苦手意識を持つ学生は多く、実習前の精神障害者との接触経験のない学生は、精神障害者に対して、否定的な感情や関わりの困難さを感じやすいことも報告されている⁽¹⁾。作業療法学生における臨床実習は、それまで学内で学習してきた基礎知識を実際の臨床場面に活かし、その過程の中で自分の課題を見つけ解決し、作業療法士としての必要な素養を身につける重要な場であるが、多くの学生は、実習に対して“できた”という実感を伴っておらず、自分の課題を認識しているものの、その課題が未解決のままである^{(2) (3)}。特に、精神障害領域の実習においては、精神障害者との接触経験の乏しさによる否定的なイメージが、学生の自発的な取り組みを鈍らせ、学生の対人面での問題が露呈することが多い⁽⁴⁾。

臨床実習のような困難な状況や未知な場面に対し、柔軟な対処行動を可能とする要因に自己効力感⁽⁵⁾がある。自己効力感とは、行動を起こす前に個人が感じる遂行可能感であり、やりたいと思っていることの実現可能性に関する評価である。自己効力感の高低が心理的適応に影響し、行動との関連が深いことが知られており⁽⁶⁾、臨床や教育の分野では、対象となるクライアントや学生の課題に対する自己効力感が課題達成に重要な働きをすることが明らかにされている⁽⁷⁾。自己効力感とは、文脈や状況にきわめて依存しており、測定の尺度は、目的とされる課題や活動、状況や特定の対象人物・集団を想定して開発されなければならない⁽⁸⁾とされている。そのため、実習という文脈における自己効力感尺度は、看護学生を対象とした看護教育の分野で多くの種類のものが蓄積されつつある^{(9) (10)}。作業療法学生は、実習場面において、精神障害領域固有の対象者対応の困難さを感じていることが明らかとなっており⁽¹¹⁾、精神障害領域臨床実習で生じる困難を対処可

能とする自己効力感の育成が求められると同時に、その教育効果を判定するための尺度が必要となると考えられる。しかし、作業療法学生を対象とした自己効力感尺度は、筆者が調べた限り存在していなかった。

以上のことから、本研究では、作業療法学生の精神障害領域臨床実習における自己効力感を高める教育介入の効果判定のための尺度を試案する。なお、本研究では、Bandura⁽⁵⁾の考えをもとに、「精神障害領域の臨床実習に対する自己効力感」とは、「精神障害領域の臨床実習において直面する経験的なあるいは未経験な新しい状況に遭遇した際に臨機応変に対処できる確信の程度」とする。

2. 方法

2.1 調査協力養成校

日本作業療法士協会の養成校一覧⁽¹²⁾に掲載されていた全国の作業療法士養成校 189 校に対して質問紙調査協力の依頼をした。その際、臨床実習履修済みの学生が存在しないと想定された新設校は除いた。21 校から調査協力の承諾が得られた。内訳は、大学 11 校、4 年制専門学校 5 校、3 年制専門学校 5 校であった。

2.2 手続き

質問紙および説明文書の配布、質問紙の回収は、調査協力養成校の教員に依頼した。説明文書には、研究の目的や同意の方法について記載し、質問紙の回答により同意の確認を行った。

調査対象者は、精神障害を有する作業療法の対象者との直接的な関わりのある評価実習、総合臨床実習を履修した者とし、見学実習や地域実習のみの履修者は除外した。加えて、調査対象者は、実習施設で臨床実習を行った者とし、学内実習で臨床実習の代替を行った者は対象外とした。

調査時期は、2021 年 9 月から 12 月までであった。

2.3 質問紙

まず、精神障害領域臨床実習を履修済みの作業療法養成課程の大学生 24 名に対して、①精神障害領域臨床実習の自信、②精神障害領域臨床実習場面で問題が生じた際の対処行動、③精神障害領域臨床実習場面での努力、④精神障害領域臨床実習での成功経験・失敗経

験に関する聞き取り調査を行い、尺度項目を作成した。そして、作成した尺度項目計 36 項目を精神障害領域臨床実習自己効力感尺度案として用い、質問紙調査を行った。教示は、「精神障害領域の実習において、自分にどれくらいあてはまりますか。該当する数字を選択してください。」であり、回答形式は、「全くあてはまらない (1 点)」から「非常にあてはまる (5 点)」までの 5 件法であった。

2.4 分析方法

まず、精神障害領域臨床実習自己効力感尺度案 36 項目の記述統計量を求め、天井効果および床効果の有無を確認し、項目選定を行った。その後、因子構造を確認するために、探索的因子分析を行った。因子分析の結果得られた項目を精神障害領域臨床実習自己効力感尺度とした。次に、下位尺度の内的整合性を確認するために、Cronbach の α 係数を算出した。

統計処理は、IBM SPSS Statistics 25 for Windows を用いた。大幅な欠損の見られるデータはなかったため、欠損等の処理をせずに分析を行った。

3. 結果

3.1 調査協力者の属性

調査協力者の属性を表 1 に示す。研究協力の承諾が得られた回答数は 271 名、精神障害領域実習の経験がない回答者や精神障害領域実習の経験は見学実習や地域実習のみの回答者の回答を除いた有効回答数は 252 名であった。

表 1 調査協力者の属性

属性区分		人数
養成校の種類	3 年制専門学校	63
	4 年制専門学校	58
	大学	131
学年	3 年	77
	4 年	175
履修した精神障害領域実習の種類	評価実習	46
	総合臨床実習	144
	評価実習および総合臨床実習	62

表 2 精神障害領域臨床実習自己効力感尺度の因子分析結果

項目		因子負荷量	
		F1	F2
F1：実習に対する自律的動機づけ ($\alpha=0.85$)			
27	実習の目標を達成するために苦手なことでも挑戦してみようと思う	0.73	-0.01
12	作業療法活動を計画・実行する際は、どうしたら対象者に伝わるかということを念頭に置く	0.61	-0.01
2	試行錯誤しながら対象者との関わり方を変えてみる	0.57	0.04
22	分からないことに対して自分なりの答えを見出したいと思う	0.55	-0.06
32	実習の目標を達成するために自分なりの計画を立てる	0.54	-0.12
10	対象者の要求に対して面倒くさくても、きちんと説明し納得してもらおうと思う	0.53	-0.15
23	分からないことに対して何が分からないのかを明確にしようとする	0.53	-0.11
25	対象者に安心感を与えるために自分もがんばろうと思う	0.53	-0.01
28	実習を通して、作業療法士になりたいという気持ちを高めたい	0.51	-0.08
11	対象者の治療目標を明確にし、目標に沿ったプログラムを立案し、実行する	0.50	-0.02
9	作業療法活動の場において自分がどのような行動をとるのが良いのかという視点を持つ	0.49	-0.14
5	関わりにくい対象者であってもどうしたら関係性が築けるのだろうと興味がわく	0.47	0.20
35	対象者を精神疾患のある患者として見る前に一人の人間として見ようと思う	0.45	0.18
36	受け身ではなく、自分から行動するよう意識する	0.42	0.14
19	分からないことがあったら指導者に質問して答えを見つけようとする	0.39	0.24
1	対象者に対して興味がある	0.38	0.23
18	指導者はなぜそうするのだろうという視点を持ちながら作業療法活動に参加する	0.37	-0.07
F2：実習場面での自己コントロール行動 ($\alpha=0.67$)			
8	対象者が良くなるためではなく、自分が傷つかないような行動をとる (R)	0.01	0.53
33	対象者の状態について分からないことがあってもそのままにする (R)	0.14	0.51
24	精神障害領域作業療法に対する興味がない (R)	0.09	0.48
31	自分が作業療法活動を行うことで対象者の有意義な時間を奪うような気がする (R)	-0.19	0.48
20	指導者に知識がないと思われるのが嫌で質問できない (R)	0.03	0.47
6	返答がないのが不安で、対象者に話しかけることができない (R)	-0.11	0.45
34	どのような対応が対象者にとって良い対応なのか分からない (R)	-0.01	0.39
26	他の実習生よりも優秀でいなければならないと思う (R)	-0.29	0.35
15	対象者に対してありのままの自分ではなく、偽った自分で対応する (R)	-0.10	0.35
	因子間相関：F1	1.00	0.30
	F2	0.30	1.00
N=248			
(R)は逆転項目を示す			

3.2 探索的因子分析

天井効果および床効果が認められた 7 項目を除外した精神障害領域臨床実習自己効力感尺度案 29 項目に対して探索的因子分析（主因子法・回転なし）を行った。固有値の減衰状況は、5.85, 2.62, 1.56, 1.44, 1.25, 1.21, …であった。前後の因子間の固有値の差は、第 1 因子・第 2 因子間 3.23, 第 2 因子・第 3 因子間 1.06, 第 3 因子・第 4 因子間 0.16, 第 4 因子・第 5 因子間 0.20, 第 5 因子・第 6 因子間 0.04 であった。固有値の減衰状況が第 2 因子・第 3 因子間以降からなだらかになっていることから 2 因子構造が妥当であると判断した。なお、回転前の 2 因子 29 項目での累積寄与率は、29.22%であった。

次に、精神障害領域臨床実習自己効力感尺度案 29 項目に対して 2 因子構造を仮定して、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。どの因子にも負荷量が 0.35 に満たない項目を削除し、同様な因子分析を繰り返した。最終的には 26 項目が残り、これらを精神障害領域臨床実習自己効力感尺度とした。因子分析結果は表 2 のようになった。第 1 因子は、「実習の目標を達成するために苦手なことでも挑戦してみようと思う」「試行錯誤しながら対象者との関わり方を変えてみる」などの自律的な理由を伴った実習態度を表す項目からなっているので、「実習に対する自律的動機づけ」因子とした。第 2 因子は、「対象者が良くなるためではなく、自分が傷つかないような行動をとる（逆転項目）」「指導者に知識がないと思われるのが嫌で質問できない（逆転項目）」などの不安なことを避ける実習態度を表す逆転項目からなっているので、「実習場面での自己コントロール行動」因子とした。各因子に 0.35 以上の負荷を示した項目群を下位尺度項目とし、それらの加算平均を下位尺度得点とした。そして、下位尺度ごとの α 係数は、「実習に対する自律的動機づけ」因子は 0.85, 「実習場面での自己コントロール行動」因子は 0.67 であった。

4. 考察

精神障害領域臨床実習自己効力感尺度の信頼性を求

めたところ、Cronbach の α 係数は、「実習に対する自律的動機づけ」因子が 0.85, 「実習場面での自己コントロール行動」因子が 0.67 であった。因子を構成する項目数が少ない場合、 α 係数の高さは却って尺度構成上の問題を抱えている恐れがある⁽¹³⁾ことや尺度作成の際に α 係数を高くすることを最優先すると、尺度仕様書で定めたドメインのバランスを崩し、測りたい構成概念の方向からずれた尺度となる⁽¹⁴⁾ことが指摘されている。そのため、 α 係数は 0.6 以上であることが望ましいとする Bagozzi⁽¹⁵⁾の基準を採用した。「実習に対する自律的動機づけ」因子、「実習場面での自己コントロール行動」因子ともに、信頼性は確保されたといえる。

5. おわりに

本研究では、作業療法学学生が精神障害領域臨床実習における自己効力感を高める教育介入の効果判定のための尺度を作成した。聞き取りによって作成した 36 の尺度項目を精神障害領域臨床実習自己効力感尺度案とし、信頼性の検証を行った。精神障害領域臨床実習履修済みの 252 名の回答を有効回答数とし、分析を行った。最終的な精神障害領域臨床実習自己効力感尺度は、26 項目となり、「実習に対する自律的動機づけ」因子、「実習場面での自己コントロール行動」因子の 2 因子構造であることと信頼性が確認された。

今後は、聞き取り調査で得られた実習時に生じた困難な出来事に対処できるよう実習前までに教育介入を行い、本研究で作成した尺度でその効果を検討する予定である。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 JP19K03072 の助成を受け実施された。

参考文献

- (1) 岡田千砂, 生田宗博, 井上克己: “作業療法学学生の「精神障害者」に対するイメージの変化について”, 作業療法, Vol.26, No.4, pp. 348-356(2007)
- (2) 田上義之, 渥美恵美, 高橋千賀子: “実習後のアンケート

- から把握できた臨床実習Ⅰの実態”，東北文化学園大学
リハビリテーション学科紀要，Vol.4，No.1，pp.45-
54(2008)
- (3) 佐々木千寿，里村恵子：“学生が臨床実習に抱く満足に関
する要因の分析”，作業療法教育研究，Vol.9，No.1，pp.4-
12(2009)
- (4) 四本かやの，永井栄一，長尾徹，野田和江：“精神障害者
の学内実習参画による学生の臨床における技能・態度に
ついての自己認識と精神障害者に対するイメージの変
化”，神戸大学保健学科紀要，Vol.21，pp.109-119(2005)
- (5) Bandura, A. : ”Self-efficacy : Toward a unifying theory
of behavioral change”, Psychological Review, Vol.8,
pp.191-215(1977)
- (6) Ewart, C. K. : ”Role of physical self-efficacy in recovery
from heart attack”, In Schwarzer, R. (Ed.), Self-
efficacy : Thought control of action, Routledge, New
York, pp.287-304(2014)
- (7) 前田基成：“自己評価による自己効力感の変容が児童の
漢字学習に及ぼす効果”，上田女子短期大学児童文化研
究所所，Vol.16，pp.81-92(1994)
- (8) 伊藤圭子：“「できる」はできるという信念で決まる／セ
ルフ・エフィカシー”，鹿毛雅治(編)，”モチベーション
をまなぶ 12 の理論“，金剛出版，東京，pp.245-280(2013)
- (9) 眞鍋えみ子，笹川寿美，松田かおり，北島謙吾，園田悦
代，種池礼子，上野範子：“看護学生の臨床実習自己効力
感尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討”，日本看護研
究学会雑誌，Vol.30，No.2，pp.43-53(2007)
- (10) 山崎幸恵，百瀬由美子，阪口しげ子：“患者との関わり
における看護学生の自己効力感(Ⅰ)―測定尺度開発の試み
―”，信州大学医療技術短期大学紀要，Vol.24，pp.61-
70(1999)
- (11) 吉村友希，與座嘉康，久崎孝浩，平岡斉士，久保田真一
郎，鈴木克明：“精神障害領域の臨床実習における困難な
出来事に対する学生の心理行動パターンの違い”，日本
教育工学会 2021 年秋季全国大会講演論文集，pp.471-
473(2021)
- (12) 日本作業療法士協会：“作業療法士養成校一覧（2021 年
度）”，https://www.jaot.or.jp/pre_education/youseikou/
(参照 2022.05.27)
- (13) 高木真寛，服部環：“国内の心理尺度作成論文における信
頼性係数の利用動向”，心理学評論，Vol.58，No.2，
pp.220-235(2015)
- (14) 吉田寿夫，石井秀宗，南風原朝和：“尺度の作成・使用と
妥当性の検討”，教育心理学年報，Vol.51，pp.213-
217(2012)
- (15) Bagozzi, R. P. : ”Measurement in marketing research:
Basic principles of questionnaire design”, In Bagozzi,
R. P.(Ed.), Principles of marketing research,
Blackwell Publishers, Oxford, pp.1-49(1994)